

# ピアホームだより

2016. 12. 10

## 第 42 回 家族と専門家の交流会

もう 20 年も続く白石先生の交流会、その秘訣は何といっても先生の人柄と精神医療に対する真摯な向き合い、そして十全な知識と患者家族に対する献身的な態度—といったものでしょうか？

これほどの権威にもかかわらず、本当に話しやすい方です。関われば関わるほど、その魅力に取りつかれ、先生の蓄積した経験(ただの経験でなく患者に寄り添い、理解しようとした上での経験)や知識を私も学び身に着けたいとの思いでやってきました。

会はずも、午前は、事前に参加者からの質問を受け、会に参加するボランティアの専門家に回答してもらい先生が総括的にまとめるこの方式で進めています。午後は、時々話題を講師を招いてお話いただきます。今回は、「家族への暴力は精神障がい者からのSOS」と

題して保健師の蔭山先生(大阪大学)と長くボランティア参加されている看護師横山先生(埼玉県立大学教授)の共同研究でした。

この会はずも感銘を受け、温かい心になって帰宅の途に就くのですが、今回は家族の厳しい現実に目を向けてくださった会となり、ひときは印象深い思いを胸に家路となりました。かいつまんで報告したいと思います。

1 質問から障がい者への周りの対応の仕方を考える

質問: 40 歳女性、12 年前に統合失調症の診断、4 年ぐらい前からげっぷが出るようになり、夕方から寝るまで背中をさすってようやく 12 時に眠りにつけるような毎が続いています。主治医は空気嚥下症と言うばかりです。

回答: 発病時の(激しい)幻覚・妄想をコントロールし療養を続けて来ると 2 次症状—困る症状が出てくるのがよくあり、このことに対処することがむしろ大きな課題になることが見られます。薬剤チェックし副作用を考える、病気も疑い身体チェックを行うことがまず必要ですが、概ねそのような問題はないケースが多いと思われます。障がい者には見通しや希望が必要です。不安を抱えストレスいっぱい暮らしています。スト

レスは①内面に②身体的に③(お酒などの)行動に出ます。そんな方に症状のことに焦点を当てて対応することは必ずしも得策ではありません。何をしても治らないという気持ちをどう受け止めるか？とりあえず症状は棚上げしてできることに注目し、少し前へ—そんな関わりが結果的に症状の改善に役立つように思います。

2 講演から障がい者を持つ家族を考える

これまで家族論といえば EE 家族論であり、家族のトラブル(最もひどいの暴力)は高 EE 家族だからとの理論で片づけて納得してきたきらいがあります。しかし、蔭山先生は家族の暴力を調査し、通常の暴力と違い危害を加える意図を持っておらず、陽性症状・認知障害・苦悩を原因と見、親はかばいたい気持ちから明るみに出さないため、密室化・長期化してこじれてしまっていることを分析しました。

内からの解消—家族が外につながる。外からの解消—本人が外につながる。ことが大切と結論付けています。

## 今月の予定

<12月10日>アドボケイト会理事会

<12月30日>年越しそば会